

『悟浄歎異』『悟浄出世』考

——中島敦と〈南洋行〉——

杉 岡 歩 美

はじめに

中島敦、昭和十七年十二月四日死去。享年三十三歳であつた。

中島は作家生活に入るまで、高校の教師や南洋庁内務部地方課国語編修書記という職に就いていた。作家以外の職業で生活をしながらも「書きたい」という思いに捉われていた中島は、自分のもの書きとしての才能を信じつつ疑っていたのであろう。彼は病床で「書きたい。書きたい。もう一人自分がいればいいのに」としきりに口走っていたそうである。^①

『弟子』（昭和18・2）『季陵』（昭和18・7）など中島の傑作とされる作品の多くが晩年に完成している。そして亡くなるわずか五ヶ月前の、昭和十七年七月三日付鈴木美江子宛書簡に「これからは〔大体、〕役人（も）をやめて、原稿を書いて生活して行くことにな

〔り〕るでせう」とあり、七月八日付の小宮山静宛書簡に「これからは、カキモノをして生活をして行くことになります」と記されている。結局、昭和十七年に南洋から帰ってきて死ぬまでの間が、作家中島敦と呼ばれる期間であつた。

中島の作品には自身を投影したと思われるものが多い。『狼疾記』（昭和17・11）の冒頭にある「養其一指、而失其肩背、而不知也、則為狼疾人也。」「かめれおん日記」（昭和17・11）のエピグラフ「蟲有虺者。一身両口、争相齧也。遂相食、因自殺。」「山月記」（昭和17・2）に書かれた「臆病な自尊心」である。「狼疾」とは『孟子』にある言葉で、一つの指を大切にするあまりに背中と肩を失ってしまう者のことと解釈されている。^② また「虺」とは「身体を二つに切断されると、直ぐに、切られた各々の部分が互ひに鬭争を始める蟲」（『かめれおん日記』三）である。

これらの性情は、いずれも中島が自身を非難して描いたものであり、〈南洋行〉後には見られない。

それでは、〈南洋行〉は中島の生き方にどのような影響を与えたのか。〈南洋行〉前後に成立したと目される、『悟浄歎異』『悟浄出世』をとりあげ、その成立事情を推定しつつ、考察を深めたい。

一

中島が昭和十七年十一月十五日、最後に手にすることが出来た自身の二冊目の単行本、それが『南島譚』である。末尾に「わが西遊記」の中」と付した『悟浄歎異』『悟浄出世』の二編が収録されている。^③

『悟浄歎異』、『悟浄出世』の成立時期については諸説がある。

これは、『悟浄歎異』原稿末尾に「昭十四・一・十五」と記された欄筆日に、赤鉛筆で縦に二本の線が引かれていることを巡る見解の相違である。その日付を信じるか、虚構と捉えるかが争点となる。参考の為に、他作品の場合を検討してみたい。

『かめれおん日記』の原稿末尾の欄外に記された「昭和十一年十二月(二十六)」は、もともと「昭十二・十二・二十六」と書かれていた。「十二年」の「二」の間を塗りつぶす形で「一」としており、その上から縦線を引き、横に「十二」と書き直している。「二

十六」は消され、「和」「年」「月」の三字は横から付け足されている。郡司勝義氏『中島敦全集』第一巻「解題」(昭和51・3・15、筑摩書房)によると、この草稿は昭和十三年二月二十五日実施の化学科調査答案用紙が用いられているとのことである。^④

『かめれおん日記』の一部が書かれた「ノート第九」は「横浜高等女学校昭和十四年度入学調査問題 読方科」用紙の裏面を用いたものであった。この点について近藤典彦氏、福島千恵子氏は、中島が「ノート」の後ろからも書き始めていることを挙げ、「うしろの第一ページ」であること、「そのページ全体に縦書きのペン字で、「空想の添加、海洋(難破)、墓地、うなされ、トマス・ステイヴンソン、青いかげ、エディンバラの説明」などと落書きさされ」ていることから「なにかに触発されて『かめれおん日記』の一節を思い出し、答案の裏にかきつけた。そしてさっさと消してしまった。」との解釈を示している。確かに「ノート第九」該当頁の文字は判読が難しい状態である。文字を消したうえに、新たに上から落書きを書いたというのは事実であろう。しかし『かめれおん日記』対応部分との著しい違いが見られないこと、また「ノート第九」の「その間に今(考へた)うかんだ思ひつきの大部分は消えて了ひ」と、「かめれおん日記」の「その間に今浮かんだ思ひつきの大部分は消えて了ひ」とを見比べると、「二節を思い出し」たというよりも、「考へ

た」と「うかんだ」の語句の選択をしている時期、つまり創作段階での草稿と考えた方がいいのではないかと思われるのである。

また『狼疾記』にも「昭十一・十一・十」の部分に同じく「二」を「一」に変えた痕跡が見受けられることから、中島には正確な日付を書く意志がなかったのではないかと考えられる。

前述したように〈南洋行〉以前は、いまだ中島が作家として起つ意識を有していなかった時期であるから、「昭和十四年一月十五日」に確実に成立したとは言い切れないのではないか。

ここで、『西遊記』及び『わが西遊記』の作品に関わると思われる書簡やノート、メモ類を検討したい。

まず、中島の書簡で「西遊記」という語が登場するのは昭和十六年五月八日である。田中西二郎宛書簡に「世界〔を〕がスピノザを知らなかつたとしたら、それは世界の不幸であつて、スピノザの不幸ではない、といふ考へ方は瘦我慢だと思ひますか? とにかく、僕は、そんな積りでもつて、西遊記(孫悟空や八戒の出でくる)を書いてゐます、僕のファウストにする意気込みなり。」とあり、また、昭和十六年六月「日付不明」、深田久彌宛書置きに「南洋へ行く前に書上げようと思つて、西遊記(孫悟空や八戒の出でくる)を始めていますが、一向にはかどりません、ファウストやツアラトウストラなど、余り立派すぎる見本が目の前にあるので、却つて巧く行き

ません」とある。

このように昭和十六年の書簡に「西遊記(孫悟空や八戒の出でくる)を書いてゐます」と孫悟空や八戒の名を記していることから、この作品を両名の出でくる『悟浄歎異』ではないかと考え、また「一向にはかどりません」と歎いていることから、南洋行前には『悟浄歎異』を作り終えていなかったのではないかとする見解がある^⑥。しかし、中島敦自身が「わが西遊記」の中」というように二作品を纏める意志を見せているので、孫悟空や八戒の出でくる作品を『悟浄歎異』と限定するのは、些か早計ではないかと思われる。

次に、十三冊残されたノートについて。その中で古いと考えられる「ノート第一」には「佛様の掌の上の孫悟空^{てんごくう}」、「ノート第四」には「過去のわが南洋」「マリヤ」などと共に「觔斗雲、如意金箍棒、羅刹女、一翠雲山芭蕉洞、玉面公主」「火焰山―祭賽國」「唵嘛呢叭咪吽」と記されている。先行研究では、「ノート第四」に南洋行後のアイデアとともに『悟浄歎異』の舞台である「火焰山」等の語句が列挙されていることが問題にされている。だが、「玉面公主」「羅刹女」などまったく関わりない語句も並べられていることを考えると、『悟浄歎異』制作中であつたのではなく、続編の構想を立てていたのではないかと捉えられる。

次に、中島の「手帳」。昭和十四年には「碧夢 茶」などと共に

「沙紅エビ也」と記され、昭和十五年には「天龍、夜叉、乾闥婆、迦樓羅、緊那ラ、摩睺羅伽、人、非人」と記されるなど、『悟浄出世』関連の記述がある。確かに「沙紅 エビ也」や「乾闥婆」など『悟浄出世』に登場する妖怪の名があるものの、ここで注目したいのは他の語句、つまり「碧夢 茶」などの言葉がかなりの数を占めている点である。さらに『悟浄出世』に多数出てくる「黒卵道人」や「坐忘先生」など登場人物の名が、「沙紅 エビ也」以外一切書かれていないことも気に掛かる。『悟浄出世』の内容に全く関わりのない言葉が、『悟浄出世』に関連する言葉と同等程度占めていて、かつ『悟浄出世』の登場人物がほとんど記されていないというのは、『悟浄出世』そのものを思い描いてこれらの語句を書いたというよりも、思いついた語句を書き散らした、もしくはメモしたと取る方がふさわしいのではないかと思われる。

以上を踏まえた上でさらに内容を考察した場合、『悟浄出世』の後半部、観世音菩薩が登場し、悩める悟浄に「無知無識にして、唯、信じて疑はざるもの」とする悟空に学べと告げるなど、『悟浄歎異』へ繋げていこうとする意図が認められるのである。少なくとも『悟浄歎異』草稿は、『悟浄出世』より先に書き上げられていたと思われる。

『悟浄歎異』の草稿と定稿の位置関係はどういったものか。草稿

がいつ書かれたのかははっきりしていない。しかし、全編に亘り緻密に加筆訂正が施されていることから、現在目に出来る『悟浄歎異』定稿よりも随分以前に書かれたのではないかと推測される。中島は晩年である昭和十七年に、『幸福』『夫婦』『雞』など『南島譚』系列の作品群、『李陵』などを次々に完成させている。それに加え『悟浄歎異』草稿・定稿も書いたとするのは分量的にあまりにも無理があるように思われる。また、中島は昭和十六年六月に南洋に渡るが、現地ではなかなか小説を書き上げられなかったらしい。たか夫人宛の十一月九日の書簡に「夜だつて、とても、書きものなんか出来ない。実は、この十月一パイ〔に〕迄に、オレは或る仕事をするつもりだつたんだが（内地に出発する時も、そのつもりで、原稿用紙などを持つて来たんだが）、はじめの七月・八月は病氣ばかり（中略）この気温ではオレには何一つ、仕事が出来ない」と記している。昭和十六年に『光と風と夢』を書き上げたことが推測できる^⑧ので、そのことを鑑みるともうすこし前に『悟浄歎異』草稿を書き終えた可能性が高い。

さらに原稿用紙について見ていく。『悟浄出世』は原稿が散逸したのに対し、『悟浄歎異』は草稿も定稿も現存する。『悟浄歎異』草稿は二十七枚で、第十五枚目までは「東京原稿H」四百字詰め用紙が使われ、第十六枚目から二十一枚目までは「伊東屋製No.80」四百

字詰め用紙、第二十二枚目から二十七枚目まで「MARUZEN II」六百字詰め用紙が使われている。「東京原稿H」は「狐憑」「木乃伊」「MARUZEN II」は「斗南先生」「虎狩」「かめれおん日記」「狼疾記」「光と風と夢」と同じ原稿用紙である。

定稿は「MARUZEN V」四百字詰め用紙を使用、定稿の「MARUZEN V」は「幸福」「夫婦」「雞」に使われたものと
同じ原稿用紙である。木村東吉氏、丸尾実子氏も指摘しているが、

定稿に使われた原稿用紙は南洋行中およびそれ以後の作品に使われ、草稿に用いられた原稿用紙は南洋行以前に書かれた話に用いられている。近藤典彦氏、福島千恵子氏は昭和十七年に現存する草稿は書かれたとし、「悟浄歎異」旧稿は他にあり、現草稿は「推敲後のすがたをきれいにながめうるようにしようとした」ものだとするが、草稿にある多くの書き込みや、上から紙を貼り書き直した部分が気に掛かる。昭和十四年成立なのかどうか、今回は置いておくことにするが、少なくとも私は「悟浄歎異」草稿は南洋行前に完成し、「悟浄歎異」定稿は南洋行後に書かれたと考える。

従来、研究者の間では、「悟浄歎異」が先に完成したのか、それとも「悟浄出世」が先なのか論争的になってきた。¹⁰

「悟浄出世」は、原稿が現存していない。しかし昭和十七年七月二十二日付の杉森久英来簡に「悟浄出世」の名が見えることからそ

の時には書き終えていたことがわかる。¹¹〈南洋行〉中あるいは後に「悟浄出世」は書かれたのであろう。

「悟浄出世」と「悟浄歎異」定稿については後に考察するが、今回、私は、成立順を「悟浄歎異」草稿→〈南洋行〉→「わが西遊記」と仮定して論証していきたい。

一

では、それらの成立に大きく関わった〈南洋行〉について再検討したい。

昭和十六年六月、中島は南洋に官吏として赴いた。当時、南洋は「大東亜共栄圏」構想に基づく植民地であり、日本人が多く住む土地であった。¹²中島は国語教科書編纂の官吏として南洋に赴いたのであるから、植民地化する側の立場の人間であった。

帰国後のエッセー「章魚木の下で」（昭和18・1）で中島は、「南洋群島の土人の間で仕事をしてゐた間は、内地の新聞も雑誌も一切目にしなかつた。文学などといふものも殆ど忘れてゐたらしい」と述べている。しかし、実際は中島が「内地の新聞」や「雑誌」を目にしたことはその書簡でわかっている。¹³中島が言いたかったのは「内地」自体との距離を感じたということではないか。〈南洋行〉は、中島敦を一時期、作家としての自分から遠ざける役割を果たしてい

たのである。

『章魚木の下で』の草稿に「自己の作物に時局性の薄いことを憂へて、とつて付けたやうな国策的色彩を施すの（私は良く知らないが、南方へ行つてゐる作家達は、実際さうした仕事に、従つてゐるのではないのか）」との文章がある。昭和十七年九月三十日付寺井寛来簡に「石坂洋次郎 尾崎士郎、今日出海等の方も徴用で一緒にこちらに来ました。その後、火野葦平、三木清、上田広等も来ました。」とあることから、「南方徴用作家」の活動を知りながら、「私は良く知らない」と記し、「文学などといふものが国家的目的に役立たせられ得るものとは考へもしなかつた」と書いていることがわかる。

戦時下という時代に於いて、文学者たちが戦地に赴いたり、「文学」を戦争に役立てたりする中で、中島は作家としての自分はどうしたらいいかを捉えることが出来たのではないか。前述したが、中島は〈南洋行〉中、作品が書けないことを幾度も歎いている。それは〈南洋行〉前には見られなかつたものである。作家意識が培われたのが、〈南洋行〉であつたに違いない。

〈南洋行〉が中島に与えた影響は、他にどのようなものがあつたのか。中島が早くから南洋の人々に強い関心と憧れを抱いていたことは、なぜ南洋に生まれなかつたのかと悩む主人公が『狼疾記』に

描かれていたことからわかる。^④

しかし、中島にとつて実際の〈南洋行〉はあまり楽しいものではなかつた。持病の喘息に加え、アメーバー赤痢、 Dengue 熱に罹るなど、はじめの三ヶ月は本当に辛いものであつたようだ。昭和十六年九月二十日付中島たか宛書簡に「僕には、将来どれだけ生きられるやら、まるで自信がない」と自身の生の短さに対する不安を記し、悲壮な覚悟をしたさまが窺える。残された人生が少ないのに加え、作品を書き綴る時間も体力も無い。焦燥感の中で自分のやりたい創作と相容れない仕事をしている自分。

同書簡はつづけて「今年の七月以来、おれはオレでなくなつた。本当にさうなんだよ。昔のオレとは、まるで違ふ、ヘンなものになつちまつた。昔の誇も自尊心も、昔の欲びもおしやべりも滑稽さも、笑ひも、今迄勉強してきた色々な修業も、みんなくしく失くして了つたんだ。ホントにオレはオレでない。お前たちのよく知つてゐる中島敦ぢやない。ヘンなオカシナ、何時も沈んだ、イヤな野郎になり果てた」と記している。この時点での中島敦の認識は「ヘンなオカシナ、何時も沈んだ、イヤな野郎になり果てた」というものであるから、南洋での生活は望ましい変化とは認識できなかったのである。しかし、今までと違う立場になつたということは、同時に、今までの自分を客観的に見るようになったということでもある。この

書簡からしばらくして書かれたものには、〈南洋行〉の中島が、日本や、自分の置かれていた環境を懐かしむ文章が多く見られるようになるのである。

〈南洋行〉は物質的にも精神的にも、今までであった世界から中島を分離する役割を果たしたのであろう。

二

作家として生きる決意をした中島は、〈南洋行〉を挟んで『わが西遊記』を完成させた。そこに〈南洋行〉の影響が見出せる。

『悟浄歎異』草稿を定稿にするまでに変えられた部分が、南洋に赴いた中島自身の考えの変化と捉えていいと考えられる。

草稿で「変化の術が人間に出来ずして狐狸に出来るのは、つまり、人間には、関心すべき種々の事柄が余りに多いが故に、精神統一が出来ぬ」からだと言われている箇所について、定稿では「出来ぬ」の部分が「至難」と変えられている点が挙げられる。もし「出来ぬ」のままであるなら、「大唐の玄奘法師に値遇し奉り、其の力で、水から出て人間と成りかほることが出来た」悟浄は、変身を望んでも「出来ぬ」ことになる。従って、この改稿は人間となったからこそのものだと思われる。つまり〈南洋行〉前、『悟浄歎異』草稿時に、中島が悟浄を人間として設定していなかったことが窺える。

それが〈南洋行〉がもたらした変化だと考えられるが、『悟浄歎異』に手を加えてまで人間にしたかったとすれば、その理由は何であらうか。

『悟浄出世』では悟浄の遍歴が書かれている。「何故」とすべてを疑う「病」を治すためにさまざまな遍歴を重ねて後、悟浄は観世音菩薩に諭される夢を見る。しかし悟浄は納得しなかった。「どうもへんだな。どうも腑に落ちない。分らないことを強ひて尋ねようとしなくなるのが、結局、分つたといふことなのか？ どうも曖昧だな！ 余り見事な脱皮ではないな！ フン、フン、どうも、うまく納得が行かぬ。」と呟く。人間となってもなお悟浄は独り言を言い続ける。妖怪であった悟浄は「独言悟浄」と仲間内から渾名されていた。その癖が全く抜けていないのである。

そもそも妖怪は、「身体と心とが、人間の世界に於ける程はつきりと分れてはゐなかつた」存在で、「自己の属性の一つだけを、極度に、他との均衡を絶して、醜い迄に、非人間的な迄に、発達させた不具者」であり、「彼等はいづれも自己の性向、世界観に絶対に固執してゐて、他との討論の結果、より高い結論に達するなどいふ事を知らなかつた。」と設定されている。

それらは中島自身が長年付き合ってきた「臆病な自尊心」のことである。「臆病な自尊心」とは「己の珠に非ざることを惧れるが故

に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた」（『山月記』）ことである。

また、中島の〈南洋行〉の動機にも「臆病な自尊心」が影響していたようである。しかし『悟浄出世』で初めて描かれたものがある。それは「臆病な自尊心」からの脱却である。「臆病な自尊心」として設定された妖怪である悟浄が、人間になったと書かれることによつて「臆病な自尊心」から抜け出したのである。

このことが、『悟浄歎異』に変更を加えても悟浄を人間にした理由ではないか。

黒卵道人や沙虹隠士、坐忘先生、白哲の青年、醜い乞食、虬髯鮎子、無腸公子、蒲衣子、斑衣蠟婆、そしてその他の賢人達の間を渡り歩いた悟浄は「賢くなる所か、何かしら自分がフハ／＼した（自分でないやうな）訳の分らないものに成り果てた」と感じる。そして観世音菩薩のお告げを受け、遍歴を終える。しかし、「うまく納得が行かぬ。とにかく、以前程、苦にならなくなつただけは、有難いが……。」との科白で話は終わる。結局、幾人もの賢人の考えを五年に亘る長い間聞き続けながら、悟浄は「訳の分らないものに成り果てた」とさえ感じている。生き物を超越している観世音菩薩の意見さえ悟浄の性質を変えられない。悟浄はこの場で漸く「微

笑」するのだが、それは「さういふ事が起りさうな時には、さういふ事が起るものだといふやつでな。……」との思いからである。

悟浄は「今迄纏まつた一つの事と思はれたものが、バラ／＼に分解された姿で受取られ、その一つの部分々々に就いて考へてゐる中に、全体の意味が解らなくなつて来る」、「自己呵責」を重ね、そして「何を見ても、何に出会うても「何故？」と直ぐ考へる。」という性格として描かれる。

これらの特質は〈南洋行〉以前の作品では「狼疾」及び「虬」としてマイナス要素として書かれていたものである。

だが、『悟浄出世』は「とにかく、以前程、苦にならなくなつただけは、有難いが……。」との一文で結ばれている。「苦にならなくなつた」のであるから負の要素でありそうもない。

元々あつた『悟浄歎異』草稿だけではどうなのか。

作品構造を見ていくと、『悟浄歎異』は、悟浄から見た『西遊記』の登場人物達という構成である。『悟浄歎異』は大きく五つの部分に分けられる。各部分の主要人物を挙げると、「悟空」、「悟空・八戒・悟浄」の部分では、「悟空、八戒、俺と我々三人は、全くをかしい位それ／＼に違つてゐる。（中略）生きものの生き方面白いものは無い。」と結ばれているが、語り手悟浄が、悟空を讚美する

場面では八戒を貶し、三蔵に賛嘆するところでは悟空を咎める。八戒を誉める章では悟空を非難する。つまりそれぞれの個性が正負の両面から描かれていることがわかる。ただ、悟浄が自身を褒める場面はない。

『悟浄歎異』では、全体を通して皆を褒めながら自分を否定する悟浄が描かれる。悟空に学ぼうと考えながらも学ぼうとせず、「感嘆してゐるだけ」なのである。これは『かめれおん日記』や『狼疾記』と同じような描かれ方である。

しかし、中島が『悟浄出世』を『悟浄歎異』の前作として配置することによって、『悟浄歎異』の悟浄は、妖怪でない『悟浄出世』での性質、即ち「自己の性向、世界観に絶対に固執」せず「自己の属性の一つだけを、極度に、他との均衡を絶して、醜い迄に、非人間的な迄に、発達させ」ていない存在となる。そのため、『悟浄歎異』の悟浄は今までのような暗さを感じさせないのである。

つまり、中島は『悟浄出世』を書くことによって悟浄を設定しなおしたのである。『悟浄歎異』が、『悟浄出世』の続編として扱われることで、悟浄の人格造型が違ってくるのではないかと考えられる。作品の目的の相違、それこそが〈南洋行〉が『わが西遊記』という作品構成に与えた影響と思われるのである。

おわりに

〈南洋行〉は、中島に自己を客観視する時間を与えたのではないかと。〈南洋行〉後に書かれた『李陵』『弟子』では、「観測者」や、「自己呵責」する登場人物は存在するものの、他人から非難される主人公は描かれていない。

自分のあり方を〈南洋行〉は再認識する期間になったと思われる。〈南洋行〉を通して『かめれおん日記』や『狼疾記』の種類に属する作品であった『悟浄歎異』ではなく、悟浄を肯定する作品として『悟浄歎異』を呈示した。この時期はやはり中島に於ける転機と捉えるべきものであろう。

そもそも『悟浄歎異』は続編の構想を持っていたと考えられている^⑬。前述した、昭和十六年六月「日付不明」深田久彌宛書簡に「南洋に行く前に書き上げようと思つて、西遊記（孫悟空や八戒の出てくる）を始めています」とあることから、中島敦の『わが西遊記』の構造が今と全く違っていた可能性があるのではないかと。『悟浄出世』を書くことによって、「歎異」している悟浄のままの『悟浄歎異』で完結を迎えることになったのである。

また中島は晩年、『幸福』『夫婦』『雛』『李陵』などを次々に完成させている、と書いた。作家として戦争と一線を画し、「ほんも

の」を書く決意をしたからこそ多くの創作が出来たと推測されるが、この行動も「南洋行」がなくては起らなかったと考えられるのである。

注

- ① 折原澄子「兄・中島敦との最後の十ヶ月」(『中島敦全集』別巻所収)に、「兄は病床で書き上げた原稿を広げ、ペンを執って推敲や清書していることが多かった。今でも忘れられないのは、すっかりほおがこげやつれていた兄が「書きたい。書きたい。もう一人自分がいればいいのに」としきりに口走っていたことだった。」とある。
- ② 例えば、長谷川勉『ファウストの比較文学的研究序説』(一九七九年、東洋出版)は、『孟子註疏』『孟子繹解』『孟子欄外書』『誦孟叢鈔』の解釈を挙げ、「指一本を大切にし肩や背を犠牲にする病める狼の性質を表現しているというのである。」とする。
- ③ 『南島譚』には、『南島譚』『環礁(ミクロナネシヤ巡島記)』『悟浄出世』『悟浄歎異(沙門悟浄の手記)』『古俗』『過去帳』が収められている。
- ④ 中島敦関連の資料は大半が神奈川県近代文学館に収められているが、実際にはこの用紙は確認できなかった。
- ⑤ 近藤典彦・福島千恵子「敦の『悟浄歎異』脱稿―あわせて『過去帳』の脱稿―」(『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第五十二号、平成十五年三月)
- ⑥ 藤村猛は『中島敦研究』(平成十年十二月二十日、溪水社)に於いて、「悟浄歎異」が昭和十四年に脱稿されたとするのは適当ではないと考えられる。ただ、昭和十四年に「悟浄歎異」の執筆や、少なくとも構想が為されたいことは想像され得る。(中略)この前後に(昭和十六年―
- 引用者注)「わが西遊記」が本格的に執筆されたと推測される。だが、その時点では完成せずに、最終的には南洋行後の昭和十七年夏頃に脱稿された。」とする。
- ⑦ 濱川勝彦「悟浄歎異―沙門悟浄の手記―鑑賞」(『鑑賞日本現代文学』17梶井基次郎・中島敦、昭和五十七年一月三十日、角川書店)、オクナ―深山信子「悟浄歎異」論―ファウストやアラトゥストラとの関連を中心に―(『田鍋幸信編』『中島敦・光と影』所収、平成元年三月一日、新有堂)
- ⑧ 昭和十六年十一月九日付中島たか宛書簡には、「身体は元気になつたが、この暑さ、むし暑さでは、頭を働かせることは、殆ど不可能といつてもいい。夜だつて、とても、書きものなんか出来ない。実は、この十月―パイ笛に、オレは或る仕事をするつもりだつたんだが(内地を出発する時も、そのつもりで、原稿用紙などを持つて来たんだが)、はじめの七月―八月は病氣ばかり、それから旅行となり、旅行に出る時もまだあきらめきれないで、原稿紙を持つて行つたのだが、事實は一枚も書けなかつた。暑さのせゐにするのは卑怯かも知れないが、実際、この気温ではオレには何一つ、仕事が出来ない。」とも記されている。この書簡は非常に長いもので今回は割愛するが、中島は南洋の暑さと、それに伴う頭の回転の悪さを嘆いている。
- ⑨ 木村東吉「中島敦『弟子』論―行動者の救済とその限界」(『国語と国文学』第六十六巻第十二号、平成元年十二月)。丸尾実子「わが西遊記」の成立(『成城文芸』第一一六二号、平成十年三月)。秋元誠「中島敦「わが西遊記」成立考」(『富山工業高等専門学校紀要』第二十六巻、平成四年三月)。
- ⑩ 『悟浄歎異』を昭和十四年成立とするのは佐々木充(『中島敦の文学』、昭和四十八年六月十五日、桜楓社)、奥野政元(『中島敦論考』、昭和六

十年四月二十五日、桜楓社）、木村一信（『中島敦論』、昭和六十一年二月二十二日、双文社出版、諏訪下由加（『中島敦論』転機としての『わが西遊記』）（『国語国文 薩摩路』第三十五卷、平成三年三月）、山下真史（『中島敦『わが西遊記』論 自意識過剰をめぐって』）（『国語と国文学』第六十八卷第十二号、平成三年十二月）、服部裕子『悟浄歎異』・『悟浄出世』論―「行為」をめぐって―（『岐阜大学 国語国文学』第二十二号、平成六年十二月）、平林文雄（『中島敦 注釈 鑑賞研究』、平成十五年三月二十日、和泉書院）など多くの研究者であり、『悟浄歎異』『悟浄出世』の順に異を呈するのは、⑨で前掲した木村東吉丸尾実子、秋元誠である。また藤村猛『中島敦研究』、オクナー深山信子『悟浄歎異』論―ファウストやツァラトゥストラとの関連を中心に―は南洋行後に成立したことは明記しているが、成立順については述べていない。その他成立順には触れない論考も多い。

⑩ 『悟浄出世』の方は、やはり少し落ちますね。全篇に流れてゐる才気（といつては失礼ですね、おばかりでなく、つまり文学としてのよさのことですが）に変わりはありませんが、この材料はやはりもつと練つた方がおもしろくなりさうに思ひます（昭和十七年七月二十二日付 杉森久英からの来簡）

⑪ たえば、南洋群島教育会『南洋群島教育史』（昭和十三年十月二十日、南洋群島教育会）の「序」に、「我が南洋群島に於ける教育は、赤道の下、皇国海の生命線を守るべき第二の国民を育成し、又、新附島民を撫育教導して真箇の皇民と化する点に於て特異且重大なる意義を蔵し、其の成果は、皇国群島統治の成果と共に永く光を伝ふべきものである。」とある。

⑫ 『中島敦全集』の書簡にさまざまな書名が挙げられているが、其の中に「文芸春秋」「改造」「中央公論」「文学界」「文芸」「新潮」の雑誌名

が見える。

⑬ 『狼疾記』に「原始的な蛮人の生活の記録を読んだり、その写真を見たりする度に、自分も彼等の一人として生れてくることは出来なかつたものだらうかと考えたものであつた。」とある。

⑭ 昭和十六年六月二十八日付、中島田宛置手紙。「全く考へれば考へる程、僕は愚かな男です、折角与へられた一年間を思ふ様に使ひもせず、気も進まぬ、無理な仕事に身を任ねるのだから、全く氣違沙汰です。実際、何もかも、おしまひになつて了つたやうです、みんな貧乏人根性のさせる業です（こんな下らぬ仕事に就かうとしたのは）恐らく僕の幽霊は、書かれなかつた原稿紙の間をうろつき廻ることせう」

⑮ 続編構想を持っていたとするのは、たとえば佐々木充『中島敦の文学』に「中島はこの点について何も書き残していないが、もし『悟浄出世』『悟浄歎異』の二篇だけで『わが西遊記』を構成しようとしたのなら、第二作品集『南島譚』に収めるとき、他の例のように『古譚』『南島譚』『古俗』などのように、『わが西遊記』という総題を付したはずである。そうしないで、末尾に、『わが西遊記』のうち」と記すだけに終つたのは、この二篇で『わが西遊記』が中島において完結したのではないことを示すと思われる。」とある。

〔付記〕 本稿で引用した中島敦の文章は、『中島敦全集』全三巻・別巻一（平成13・10・10～平成14・5・20、筑摩書房）を底本とする。原則として旧漢字は新漢字に直し、ルビを簡略化した。

また、中島敦資料の閲覧にあたっては、神奈川近代文学館、日本大学のご高配を得た。謝意を表したい。